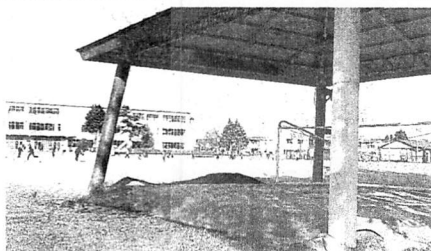


細る競技 次世代を争奪

王国寂れる地域の土俵



使われず小学校の校庭の隅に残る土俵。2014年11月、青森県六戸町

人口減
につぼ

相撲の灯が消えかけている。北海道夕張市の柔道場。この冬、夕張相撲スポーツ少年団に所属する中学2年の斎藤昂生君が、中3の

先輩と2人きりで稽古に励んでいた。表情はどこかさえない。「先輩が卒業したら団員は僕だけ。ぶつかり稽古はできなくなる」

炭都として栄えた夕張には50年ほど前まで、炭鉱ごとに相撲部があった。だが、炭鉱閉山により次々と解散。その後、育成を目的に発足したのがこの少年団だった。大相撲の若貴ブー

ムに沸いた1990年代には約20人の団員がいたが、存続の危機にあえぐ。北海道全体でも相撲は衰退の一途をたどる。大鵬や千代の富士ら名横綱が輩出した道出身の関取（十両以上）は今、1人もいない。

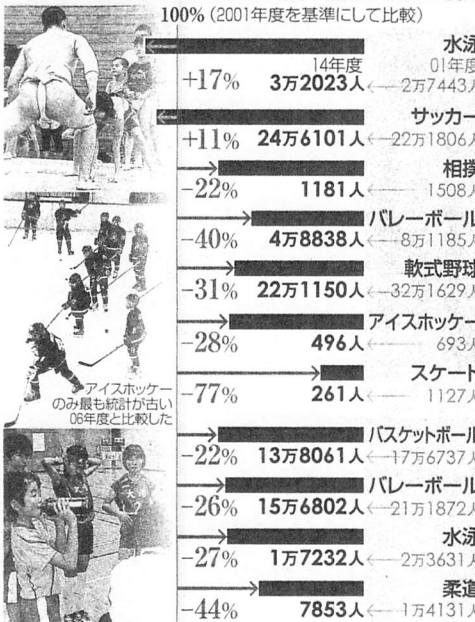
北海道と並ぶ「相撲王国」だった青森県。県教委によると、2004年度に245人だった小学生の競技者数は13年度は64人に減った。県相撲連盟の桜田一雅理事長は、働き盛りの年代の指導者不足を一因に挙げる。「相撲の強豪大学に進んだ後、地元に戻りたく

ても就職先がない」進む過疎化、少子化は、競技力の低下を招くばかりか、子どもたちの競技選択の幅も狭めてしまう。中学生年代の競技人口を伸ばしているのはサッカーなどごく一部だけで、多くの競技が少子化の影響を受ける。ラグビーもその一つだ。

7日まで大阪で熱戦が続く第94回全国高校大会の予選参加校数は986で、最多だった91年度の約3分の2。島根県予選に出たのは2チームだけで、福井、高知、佐賀も3校にとどまった。福井県ラグビー協会の玉井康弘理事長は、「見た目が危ないというイメージで避けられてしまう」。

工夫を凝らす競技もある。バレーボールは新しいカテゴリをつくった。昨年11月、鹿児島県霧島市では24チームが参加し、県小学生バレーボール男女優勝大会の混合の部が行われた。同県に混合の部が設

日本中学校体育連盟の主な競技の加盟人数の比較



日本中学校体育連盟が競技別の加盟人数の統計を取り始めた2001年度と、今年度を比較した。中学生全体の数は01年度が399万1911人、今年度は350万4334人で12%減。サッカーや男子水泳は普及に成功している一方、柔道やバレーボールが大苦戦。冬季競技も減少傾向が著しい。

一方、お金を払ってスポーツを習う子どもは、都心部を中心に増えている。大手スポーツクラブ「セントラルスポーツ」（本社・東京都中央区）では、体

育や0歳児から参加できる水泳のプログラムが人気だ。子どもの運動能力低下を心配する親の需要の高まりとともに、東京五輪開催決定も追い風になった。09年以降、クラブ全体の会員数はほぼ横ばいだが、子

も会員は毎年増加。「1人にかける教育費は昔よりも高いと感じる」と同クラブ。コナミススポーツ＆ライフ（本社・東京都品川区）も子ども向けのスクール事業を強化し、東施吉輔を今

教育熱 人気の種目に集中

けられて22年目。男女に分けると6人そろわないチームの救済策だった。混合の部は昨夏から、全日本小学生大会でも採用された。日本バレーボール協会が競技人口拡大を担当する工藤憲・運営委員は「小学生の登録数は毎年2千人以上の減少が続く。2020年東京五輪後の近い将来、マイナー競技になってしまおうという危機感がある」と話す。

メンバー不足に悩むチームの存続策の一つが、合同チーム結成だ。各学校の行事もあって全員がそろそろ練習機会が限られるなど壁はあるが、アイスホッケーでは昨年、全国中学大会で北海道釧路市と鶴居村の四つの中学校でつくる「釧路西部」が頂点に立った。合同チーム初の快挙だ。釧路市立鳥取西中2年の寺嶋颯人君は「意思疎通を重視することで、強いチームが作れる」と証明できた胸を張る。

用負担は小さくないが、問い合わせは増えている。昨夏、15歳の長男をテニス留学させた主婦の中山あつこさんは「一流コーチの指導を受けることができ、語学も学べる。お金と時間をかける意味がある」。根本真吾代表は「留学する半数以上が有名私立中高の生徒。経済的な理由で二極化が進んでいる感はあるが、まだまだ伸びると思う」と話す。（神原一生、中小路徹）

2015年(平成27年)1月3日 土曜日

享月 日 薬斤 門